

# CAPNA

## ニュースレター



第6号

1997年10月26日

発行人 祖父江文宏  
編集人 石川 洋明

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち  
名古屋市中区丸の内1-4-404 (〒460)  
Tel&Fax:052-232-2880

# 新たな一歩

## ホットラインを全平日に



10月6日午前10時。CAPNAは新しい一歩をふみ出しました。結成以来の目標だった「すべての平日」のホットラインがスタートしたのです。

この意義は、電話相談が従来の週2回から週5回に増えただけのことではありません。

何よりも重要なのは、子育ての悩みを抱えた人、見過ごせない問題を知った人が、すぐに受話器に手を伸ばせるようになったこと。そして、一人前の電話相談機関として社会に認知される土台を築いたことです。そのために、CAPNAは一年半をかけて34人の電話相談員を新たに養成しました。そして、会員たちが費用を出し合って今年8月に名古屋市中区内のマンションを購入し、相談事業の拠点となる新事務所を開設しました。広報体制の強化に向けて、ロゴマークも一新しました。

児童虐待の防止を社会に訴え、市民の共感を広げ、早期発見・早期援助のネットワークを築くために、私たちは引き続き続けます。

これからも温かくて厳しい目で、市民団体CAPNAを守ってください。

名古屋ホットラインは052(232)0624＝土日祭日を除くAM10:00～PM4:00。

また、東海市0562(36)0624＝でも従来通り木曜の同時時間帯に受け付けています。

## CAPNAはいつでも待っています

ホットラインの拡大にあたり電話スタッフ4人に抱負をうかがいました。

### □ホットラインの現状

—これまで電話スタッフの中心となってこられた方々。現状はどうか。

上野:この2年間は名古屋と東海市で週2回の電話相談を受けていました。しかし、利用者からは「必要な時にお休みに困る」「ホットラインで話すことでなんとか子育てをしているので毎日にしてほしい」など要望が寄せられているんです。

田島:これまでは1日当たり最高で6件ぐらいしか受けられないんです。ですから、「CAPNAはいつでも待っていますよ」というメッセージを送っていても、現実にはそれに応えていなかったんです。利用者の相談にかなり応えられるのではないのでしょうか。

—子どもの虐待に対する危機介入には?

田島:危機介入というのは、まずSOSをキャッチするところから始まります。今の週2日の体制では、その可能性が七分の二になってしまっているということです。

今すぐ子どもを何とかしたいと思っているお母さんや周囲の方に対して、次の相談日まで待つて下さいということでは、間に合わない場合もあります。週5日になれば迅速な対応が可能です。

### □新人電話スタッフへの期待

—1年半の養成講座を終えて34名の方が新たにホットラインの電話相談を担うことになりました。8月から電話を受けての感想は?

山田:最初はとても緊張して電話を受けました。とにかく自分が落ち着いて、利用者が何をおっしゃりたいかを、つかむことに一生懸命でした。後で振り返ってみて、ああすればよかったの、と思うこともあるんです。危機介入の判断が大変むづかしいと思います。でも、このホットラインは個人で受けているのではなくて、私の後ろにはたくさんの専門職助言者=医師・弁護士・臨床心理士・ソーシャルワーカーなど(バックスタッフ)が付いてくださると思うと、安心して電話を受けることができました。

榊原:私も同じような感じを持っているんです。特に危機介入のケースになった場合は、バックスタッフの助言が必要です。でも常に電話の近くに居るのはむづかしいと思うんです。

山田:私はこんな自分が電話相談員をしているということが、利用者の方に申し訳ないという気持ちになりました。これからは、毎日が自分の勉強なんだという意識を強く持ちました。

### □サポートスタッフとバックスタッフの役割分担

—バックスタッフのことが出ましたが。

上野:10月からは相談の件数も3倍程度に増加することが予想されます。これまでのように、何でもバックスタッフ(専門家=医師・弁護士・臨床心理士・ソーシャルワーカーなど)につなぐことは、その負担を考えると難しいと思うんです。

そこで危機介入が必要な場合には、今どの専門家が必要で、どこに連絡していけばよいのかを判断しながら動ける人、つまり、ケースをコーディネートできる人材が必要になると思うんです。

そして、CAPNAとしてアフターケアも含めて行っていけるといいなと思っています。

—具体的にはどういう人を養成するのでしょうか?

田島:CAPNAではそういう人材を「サポートスタッフ」と呼ぶことにしました。

具体的には運営委員やこれまで2年間電話相談に携わってきた人達の中から、危機介入や子どもの虐待ケースのコーディネートなどについて、実践的な養成訓練を行った人を電話スタッフの近くで待機させることになったんです。これで、新人の電話スタッフの方も安心して電話が受けられると思いますし、ケースに対してきめ細かな対応ができるんじゃないかと思うんです。

上野:子どもの虐待防止活動では、子どもを守り救うためにどのようなネットワークが組めるか、ということに成否がかかっていると思うんです。その意味では、サポートスタッフがキーパーソンになって、ネットワークよく活動できるようになっていきたいですね。

—ホットラインの今後の課題を一言

上野:地域で子どもの虐待を防止したり通報できる方がたくさんCAPNAの会員になってほしいですね。

山田:早くCAPNAの活動に馴れて、少しでも役立てばいいんじゃないかと思います。

田島:ネットワークのキーステーションになれることが一番大切だと思うんです。

榊原:危機介入的な電話と育児相談的な電話があるので、両方とも大切にしたいですね。

—これからがんばりましょう。ありがとうございました。(文、司会、兼田智彦)

# 2周年を迎えたCAPNAへ

## ～会員からのメッセージ～

設立2周年を迎え、CAPNAはさらなる一步を踏み出しました。現在の会員数は約320名。様々な、職種や立場の方々が活動を支えています。そのうちの5名の方に、CAPNAへの思いや期待などを寄せていただきました。

### 小児科診療の窓口から

野村春子（小児科医師）

昨年、新聞で当地での虐待児の死亡記事を見て気になり、過去のカルテをくってみましたら、乳児期に私が診ていた子供さんでした。お母さんと受診されておられましたが、特に印象に残る事柄はありませんでした。1歳過ぎよりカルテの記入がなく、（新聞記事より離婚後から来院がないことがわかりました）この事件で、驚きと共に心が案断とした空虚な思いにかられました。そして、この時CAPNAのことを知り、何かお手伝いすることはないと会員にさせていただきました。

私は小児科開業15年になります。駅前という土地柄か、乳幼児期の両親の離婚が目立ち、母子、父子家庭の多さには内心驚きをもっております。また、待合室では子供に無関心、またはガミガミと口やかましく手の出る親さんが、診察室に入ると手の裏を返したように、やさしい物わがりの良いお父さん、お母さんに変身することにも驚かされています。そういう場合は、大抵、子供が多動的で、情緒不安があります。子供としては一生懸命にサインを送っていると思うのですが、親にとっては困った子供に映るようです。

親さんも疲れているのかなーと感じることもあります。こういう時に、おじいちゃん、おばあちゃんが間に入って、孫を可愛がってもらえると子供も落ちつくのだらうとも思います。ただ、最近の40～50代のおばあちゃん達は仕事をもっておられる方が多く、今の子供は違うからと孫に手を出さない人も増えて来ています。

また、最近共働きが常識的になり、保育園に通う子供の年齢が低下して来ています。お母さんが保育園を全面信頼しておられるのはいいのですが、保育園での子供の行動に対する関心度が低いように思われます。子供さんが熱を出しても、日中は保育園に行っているのだからわかりません。

保母さんは何も話してくれませんでしたとおっしゃいます。

子供達の様子は、複数の親や子供の話を聞くなかでつかむことができます。団地等では、親さんの毎日の会話の中で、同じ年代の子供のことが語られています。一方、近所づき合いのない親子は、親子の間に緊張感が出てくるようです。こうしてみると、人間は集団の中で生きるものなのだなーと感じますが、孤立化した核家族は、少しずつ増えているように思います。

会員になることでしか協力できず、心苦しいのですが、皆様の活躍を聞かせていただくと、心が慰められます。ありがとうございます。

### 凍てついた目に、どのような眼差しを照らし返すべきか？

定森恭司（臨床心理士）

CAPNAの活動が2周年を迎え、自前の事務所を所有するまでに至ったことを大変心強く思います。そこでこの機会に、最近考えはじめていることを記しておきたいと思います。それは端的に言えばCAPNAの活動の重点が、「子どもの権利の代弁性だけでいいのであろうか？」といった疑問です。「だけ」というところがミソです。見相で児童福祉臨床を長く経験し、現在も関業心理臨床の身で、この世で様々な傷を負った人々の心と向きあっていると、直接的・間接的であるかを問わず、「人という存在はいかに多くの暴力や衝動などに日々晒され続けられているものか」と嫌というほど思い知らされます。

すると、私の中では、CAPNAの活動の本質は被虐待者の子どもたちの権利代弁性以上のものであろうと思うようになってきたわけです。この問題の本質はいきつくところ人間性の奥に潜む怨念・憤怒・憎悪などのテーマにかかわるものであり、できれば誰もが避けて通りたいテーマであり

心の色

僕の心の色

絵の具の中から選べといわれても

赤のようでも赤じゃない

青のようでも青じゃない

緑のようでも黄でもない

だから全部混ぜるしかないんだ

みんな混ぜ合わせたら

黒色になってしまったー

やっぱり黒が僕なんだろうか

そう、あなたは黒色

いろんな色を秘めた黒

素敵じゃない

その時々にとりだせばいい

あなたの一番好きな色を

そして疲れたら

いつでもお帰りなさい

黒はきつとあなたを休ませてくれるわ



離婚の事件で妻を前にしても、勿論いじめ・虐待事  
件で子どもを前にしても、子どもたちの心の声  
にならばよいびがひしと伝わってくる。大人は  
何をすればよいのだろうと、いや、その前に、大人は  
いけないことは何だろうと、考え方もよい声もなし  
られない叫びに寄り添い共に歩みつつけるだろうか。

山田万里子

弁護士

人間性の根幹にかかわる類のものではないでしょうか？個々の虐待事例には、ある子やその両親特有の個別的な次元の問題とともに、その家族を取り囲む社会・文化的な次元、さらに人間性の根源にある普遍的で、象徴的な意味での善・悪のテーマも顕在化してきます。この視座に立つと、我々の運動が、個々の事例が単なる個別の次元で済まされる問題だけではないと主張するのが当然のように、社会制度的な枠組みの变革や法的不備の整備、子どもの人権意識の理解だけでなく、決してきれいな事では済まされない人間にとってより根源的なテーマを取り上げる必要を感じるのです。

虐待を受けた子どもたちの凍てつく眼差しに、我々は、単なる同情だけではなく、誰の心にも内在する人間性の影と対面する力が求められるように思います。夢分析などで垣間みられる被虐待者の深層世界は、残酷性や暴力性によって象徴される世界ばかりです。しかし彼らはそうした世界を心の内に抱きながらも、本当にこの世はそれだけの世界かどうか、いかなる世界に自らが生き残ることができるのかを、あたかも確かめるようにして人々に訴えかけても来ます。

被虐待児の眼差や声なき声と向きあい、彼らの目が輝き笑うことのできるような眼差や態度を照らし返せる人々は、恐らく残酷性や暴力性を超える力をもつ人々ではないでしょうか。とするなら

ば、虐待防止の運動が今日以上の拡がりをもつためにも、人間性の奥に潜む残酷性や暴力性に立ち向かえる人々の眠れる心と呼び覚ますことが大切と思うのです。CAPNAの運動が、より多くの人々の眠れる心を揺さぶり、次ぎなるステップに飛躍していく道を皆さんと共にこれからも探求していきたいと思えます。

フツウの人が持っている情念に形を！

それが生きている人だけにできること

杉山克巳 (大学教員)

私はCAPNAの賛助会員の杉山と申します。同僚に運営委員がいるので賛助会員になったような気がします。今回も会員からの声を、というので説得されました。で、悪いから、今まで積読になっていたニュースレターを初めてまともに読みました。面白いし、いいこと書いてあるじゃない、が素直な感想。

CAPNAに対して何かメッセージというので、他人事のように書きますが、私みたいにニュースレターを受け取るだけの会員は他にもいるでしょう。だから、ニュースレターを送っていることでもって会員へ活動報告しているとか知識を伝えていると思うのは多分まちがえ。では、どうしたら良いかと逆に問われると私も困ります。興味関心

を持ってもらえるように色々工夫することはもちろん必要。でも、こんな(賛助)会員がいるのもフツーじゃないのかな。

ところで、私は東海・薬害エイズを考える会の世話人をしています。こちらでも似たようなもの。薬物依存者の社会復帰についても関心あるし、最近ヘルス・プロモーションの研究会にも誘われました。職業リハビリテーション学会の情報化委員会にも加わり、滞日外国人の医療保障を検討する研究会にも出ています。他にも幾つか、賛助会費やら会費やらをいくら払っているのかな(二;)。さてさて、こうなるとCAPNAは私にとっては幾つかの一つです。これもさほど不思議なことではありません。気になることは、幾つかの会でメンバーが重なっていること。金太郎飴です。どこで切っても同じ様な顔ぶれ。これは多分こうした活動をしている人々共通の課題でしょう。解答は知りません。知っていれば私が真っ先にやっています。どなたか良い知恵を!!

もう一つ。百人一首にある「瀬をはやみ、岩にさくると滝川の分かれても末に逢わんとぞ思ふ」を私は好きです。これは恋歌。しかし、分かれさせられている「何か」を前に「末には逢う!」という意志は恋する二人に限ったことではないでしょう。むしろ、人間のすさまじい情念を感じます。幸せになりたい、傷つけられたくもなければ傷つけたくもない。専門家とか支援者と呼ばれる者はこうした情念に具体的な流れ、方向を示します。示すだけ。具体的な活動を支えるのは何とかしたいという人々の情念。CAPNAの「専門家」も具体的などころを支えているのは、専門家としてのかもしれませんが、情念・情熱。私は、できるだけそれに冷水かけないように賛助したいと思います。そうそう、私の本業では学生さんにもエールを送りたい。

## ソーシャルワーカーの苦悩に理解を!

鈴木逸男(児童福祉司・ソーシャルワーカー)

手許に、デイビッド・ゴフ氏の「児童虐待のケースワークとスーパービジョン」と題する論文があります。ワーカーの苦悩を理解していただきたく、同論文を引用してメッセージとします。

1. 児童虐待に関わるソーシャルワーカーの中心的役割は、子どもとその家族に対して、治療とサポートを与えることだと考えられている。しかし、実際は、児童虐待防止を確実に行うことである。

2. ワーカーは常にストレスを抱えている。例えば、私生活からのストレス、上司や同僚との間で起こるストレス、組織とワーカーとの間で起こるストレス、そして、仕事上で体験するストレスなどである。

3. 児童虐待防止は、非常にストレスフルな仕事で、ワーカーのバーンアウト(燃えつき)を引き起こす。バーンアウトになると、身体的感情的な疲労を感じ、仕事を避けるようになる。そして、クライアントに対して興味と敬意を失う。

4. ワーカーにとって、最も強いストレスとなることは、子どもを適切に虐待から救えないことである。虐待の再発に対して責任を感じることは、再発を防げなかったと他の人から思われることは、ワーカーにとって大変なストレスとなる。

5. もう一つのストレスの要因として、親を助けたいにもかかわらず、子どもを親元から離す作業をしなくてはならないことである。虐待の加害者である親も辛い幼児体験をしていることもあり、ある意味では被害者である。

6. 多分、一番ストレスを感じるのは、ワーカーがもつ複数の役割の間に衝突や矛盾が生じた時であろう。例えば、「失敗したのではないか」と他の専門家やメディアから避難を受けた時などは大きなストレスとなる。危険にさらされている子どもが死に至ると、ワーカーは、「子どもを家庭から離せなかったのか」または「死を避けられなかったのか」と非難を受けるのである。

小心なワーカーである私は、CAPNAから電話があるたびに、ヒーとした思いと動悸を感じています。これからはNPOの時代ですので、CAPNAの発展と成長を期待していますが、正義の味方という月光仮面のようなCAPNAベルソナに陥らないで、共に社会の痛みを共有する実効性のあるネットワークを構築していきたいものです。

## 暑い夏に

CAPNA代表 祖父江文宏

「あの人に殺されるって思った。すっごく怖かった。あの人、私に包丁を振り上げた」

感情を取り外した言葉がばらばらの音となって、空間に散っていきました。

わたしは良子さんの荒れた心を見るように、窓外に、乾いて白い夏を見ていました。

「わたしが悪かったんだよな。やっば」

良子さんにとってこの夏は、虐待を受けることで消してしまった自分を見つけ、自分とはなにか、なぜ生まれてきたのかを問わなければならない暑い夏でした。

「あのひとが言う通りにしてたら、あのひと怒らんかったし、そうしたら、わたしが家を飛び出すこともなかったんだ」

「学園に来たことを後悔してるの」

「後悔じゃないけど、学園に居るのもつらい。みんなとうまくいってないんだ」

「ぶつかるのかな、学園の人たちと」

「ぶつかっても気にはしてない。べつに、関係ないから。わたしはわたしだし。みんなと居るのうっとうしいもん」

「みんなと居るのがうっとうしいから、帰りが夜中になるのかな、このごろ」

「べつに迷惑はかけていないでしょう」

「そうかな、あなたの帰りを心配しながら先生たちは待って居るんだ」

「うっとうしいよ、先生たち。ぶつぶつ言うもん。心配なんかしてもらわなくてもいい。わたし、だれの世話にもならんもん」

「あなたは、世話をかけてほしくて、わざと心配をかけていると思っていたよ」

「わたし、嫌な奴だものな。自分が嫌い」

吐き捨てるように言った良子さんの顔に、苦悩に似た不安が影のように差していました。

「ぼくは良子さんが好きだよ。学園に来る前はお母さんの暴力にじっと耐えてきたし、なにより、今ここにいてくれるんだもの。あなたが居てくれるだけでぼくは嬉しいよ」

黙ってしまった良子さんに、わたしは、繁がるべき言葉を探しあぐねていました。

おかげさまで、CAPNAは結成2周年を迎えます。虐待を受けてしまった人の心の癒しが、救済のときから考えられ、傷つけられた小さい人を受け止める場がさらに広がりますよう。

会員各位のより一層のご支援を！

中日新聞記者 安藤 明夫

日本では、90年代になって児童虐待防止の市民運動が広がってきました。

イギリスでも、児童虐待防止の最初の市民団体 NSPCC (National Society for the Prevention of Cruelty to Children) が生まれたのも90年代。ただし、100年前の1890年代です。

現在のNSPCCは、有給スタッフ1000人以上を雇用し、年間90億円を動かしています。そのテレビCMのビデオを持ってきましたので、ご覧ください。

— (CMより) —

「あなたの毎月2ポンド (約450円) の寄付が、子どもたちを虐待から守ります」と字幕。哀愁を帯びたバラードが流れる中、寂しそうな子供のアップ。続いて、父親の暴力や子どもの死をイメージさせる映像が次々に切りかわり、そのたびに字幕が現われる。「毎年1万3千人の子どもたちが殴られたり、蹴られたり、けがをしています」「少なくとも1万千人の子が飢えや寒さや育児放棄に直面しています」「毎週一人の割合で、5歳以下の子どもたちが亡くなっています」…。再度、寄付の呼びかけをして、CM終了—。

この団体にとって「情報発信」とは、単に情報を社会に伝えることではありません。知らないだれかの、眠っていた善意を揺り起こし「何とかしたい」という行動にかきたてることなのです。CMを観た人がクレジットカードで、毎月5ポンドを引き落とす手続きをしてくれるようにと、企業に負けない広報をしています。心に訴える技術がない団体は、消えていくしかありません。

イギリスやアメリカのNPO(非営利団体)は長い歴史の中で、社会に不可欠な存在となってきました。税制優遇などの制度に支えられている面も大きいのですが、市民の共感を得る戦略も、日本とは雲泥の差です。

日本でも近くNPO法が制定されそうですが、市民団体の将来は課題だらけ。業界と行政の論理だけで動いてきた社会を変えていくのは大変です。しかし、センスのある情報発信によって結ばれた市民の力が、それを可能にすると信じたいと思います。



私は障害を持つ息子がいて、親の会のニューズレターを担当していますが、その中でも情報発信によって状況が変わっていく手ごたえを感じます。障害を持つ子が「親亡き後」も安心して暮らしていける社会を作っていきたいと夢見ています。

CAPNAが大きくなることも、私にとっては全く同じ意味です。できる範囲でお手伝いをしていきたいと思います。

(文、安藤明夫)

日本子どもの虐待防止研究会・横浜大会

と き：1997年12月12日(金)  
10時00分~17時30分  
12月13日(土)  
9時30分~17時00分

ところ：パシフィコ横浜(会議センター)  
〒230横浜市西区みなとみらい1-1-1  
電話 045-221-2155(総合案内)

参加費：8,000円(抄録代を含む)  
主 催：日本子どもの虐待防止研究会  
・横浜大会実行委員会  
(実行委員長：松井一郎)

事務局：〒240 横浜市保土ヶ谷区川辺町5-10  
横浜市中央児童相談所内

電 話：045-333-5176・FAX 045-333-5176

## 会員動向 (1997年8月～9月)

### 【継続】

#### 正会員

柴田睦 竹内泰子 森久子 泰良真理子 新崎道子 山田牧子 青木清子 TAKUYA SATOU.H.D.  
高橋和子 矢満田篤二 大曾根京考 酒井直江 西山仁 若山アキ子 高橋直紹 相原克子  
常富佳子 村田智子 荒堀憲二 木戸洋子 多田元 多田耕史 村橋恭代 近藤くみ子 阿部陽子

#### 賛助会員

山下勇樹 北村栄 近田澄江 小川律子 日比野元子

### 【新規】

#### 正会員

原田直子 伊藤智香子 酒井美代子 宇土知里 早川真理 奥野利香 大橋利江 金森史枝  
向山真由美 木下詔子 脇田町子

#### 賛助会員

内川恵一 隠岐美智子

## <事務局便り>

1. 9月25日(火)午後10時からNHK教育テレビで「ETV特集 虐待・心の傷を乗り越えて～暁学園・子どもたちの記録～」が放映されました。CAPNA代表が施設長を務める養護施設「暁学園」では、CAPNAが介入した母親や子どもたちの再生のドラマが展開されています。虐待問題に関わってはじめて、心の傷(トラウマ)の癒しとはまさしく人間性の回復であること、「癒し」は決して癒す側と癒される側に分断されるものではなく、双方の心が共に癒される精神的共同作業であることを実感しました。同時に、刑事司法制度における「処罰」の発想が「治療」「援助」の発想に転換されるのは何時のことだろうかと考えています。

2. CAPNAのこの2年間の活動をまとめた報告集を近日中に発行する予定です。また、日井運も現在「子どもの虐待防止マニュアル」の編集・出版に取り組んでいます。

3. 10月26日(日)に「CAPNA2周年記念シンポジウム」を開催します。また、12月12・13日には「日本子どもの虐待防止研究会・横浜大会」も開催されます。CAPNAは、愛知県近隣に深く根をおろすとともに、全国的なネットワーク活動にも積極的に協力していこうと思っています。どうかこれからもご支援下さい。

(事務局長 岩城正光)

## 会員募集

子どもの虐待防止について、一緒に考えていきませんか。市民一人ひとりの願いが重なれば、より大きなパワーが生まれます。是非、身近な方々にもご紹介下さい。

〈年会費〉	個人会員	正会員	5000円
		賛助会員	1口1万円
	法人・団体会員		1口1万円
	準会員(学生など)		3000円

〈寄付金〉 制限なし  
申し込み 〒460名古屋市中区丸の内1-4-4-404  
TEL,FAX 052(232)2880

郵便振替 00880-2-102543  
子どもの虐待防止ネットワーク・あいち



CAPNAの新しい一歩を象徴するように、ニュースレターも装いを改めました。本号では5名の会員にメッセージをいただきましたが、もっとたくさんの方の声を聞きたいと思った方も多いことでしょう。より広く会員をつなぐニュースレターに！と思っています。皆様からのお便り、FAXをお待ちしています。

(6号担当 白石淑江)

電話相談は、(いずれも午前10時～午後4時)

**052-232-0624**

(毎週月～金曜日)

**0562-36-0624**

(毎週木曜日)

CAPNAニュースレター第6号

スタッフ 白石淑江(6号担当)、石川洋明、橋本尚美、井上 薫  
協力 安藤明夫